





菊池 陽

きくち・よう
岩手県盛岡市

地震のときは、北上市の自宅にいました。盛岡市から一時間くらいのところですよ。私の実家はもう少し東側の北上山系の山村で、八十四、八十五歳になる年とつた両親が二人で住んでいます（歌番号5）。両親とは地震から三日後くらいに、道路が通れるようになってから会えました。無事でした。会った途端、涙が出てきました。両親もそうでしたが、ひどい被害のニュースがどんどん入ってくるなか、二人が生きていたというだけでも充分でした。子どもたちは東京にいます。彼らともなかなか電話が通じませんでした。通じるのが当たり前の世の中だと、通じないだけで恐怖を感じます。それは、何か異常があるという報せでもありませんから。

短歌を始めたのは小学生のころです。実は、両親が短歌を作っていたのでその影響でやってみたくまりました。雑誌に投稿して入賞したりすると、「これは楽しいな」とてね。短歌は、三十一文字でそのときの思いを伝えられます。その場にいなかった

人も共感できる。これが短歌の良さだと思えます。短歌や詩、もちろん文章でもいいですが、表現の手段をもつというところは非常に大切です。心を打たれたり、悲しんだり、辛い思いをしたりしても、そのときの気持ちを表現しておかなければ消えてなくなってしまいます。私は高校生たちにも短歌を作らせています。たとえば修学旅行へ行つて、その経験を歌にする。普通はただ行って帰ってくるだけです。短歌にすると、そのときの思いがはっきり形になってあらわれてくるのです。

震災後の東北では、たとえ人々はすべてを失ったとしても、ここから始めるしかありません。再び始めれば、人々は前を向こうという気持ちになって動き始めています。この地獄絵みみたいな状態をほんとうによく乗り越えたと思います。人はこうして生きていくわけで、これからもいろんな場面で喜びも悲しみも心に留めながら生きていきたい。特にこの震災短歌をきっかけにして、様々な人たちに出会えました。歌を作っていてよかったと心から思えるのは、まさにこうした瞬間です。

二〇一二年十二月